介 護 職 員 自 己 評 価 表

2021年4月20日

事業所名	認知症対応型共同生活介護 グループホーム瀬々串

	正社員	非常勤社員
介護支援専門員	1人	
介護福祉士	8人	1人
実務者･初任者研修	3人	1人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備　考
前回の課題に関する改善	6.6%	33.9%	43.8%	15.7%	

前回の改善計画

認知症ケアにストレスを感じるスタッフが一定数みられ、定期的な研修等により、表情や反応の癖、気を配るときのコツなどを習得する計画とした。入居者は、認知症で自宅生活が難しくなり入所に至ったケースも多く、生活歴から生活で担える役割を見い出し、その一部を担い生活リズムを整える計画とした。支援の判断や医療連携は、カンファレンスにより検討し情報を共有する体制を計画した。歩行に課題がある入居者の中には、睡眠障害に関連し転倒リスクを高める傾向があり、離床及び臥床時の体動、睡眠状態等のデータを活かして検討し、ご家族の同意を得て医療連携する計画とした。スタッフのスキルアップは、ケースカンファレンスで特徴や癖を把握し、入居者ペースに近づけた支援を提供することで、ラポール形成と生活リズムを整える計画とした。

前回の改善計画に対する取組み結果

コロナ禍の備えを徹底しつつ、家族的な雰囲気と活動性の確保に努めている。ご家族には、直接会う面会は制限させて頂いているが、大型モニターを活かした等身大のオンライン面会でご家族と入居者の関わりは維持され、離れた場所からスマートフォンやパソコンで面会できるとした評価を頂いている。利用者の外出支援や地域の方との接触は、可能な限り制限させて頂いているが、地域の方が季節の野菜や花を施設に提供して下さるなど、季節感と地域との繋がりを感じられる雰囲気になっている。日中の活動量が確保されていることで、生活リズムは概ね維持されているものの、テーマを決めて季節感を感じる歌や時代を感じる音楽を提供するなど、支援に係るスタッフ負担は大きくなっている。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合　計
SECTION　1	対象者の接し方や態度について	0.0%	36.4%	45.5%	18.2%	100%
SECTION　2	仕事上の態度について	0.0%	36.4%	45.5%	18.2%	100%
SECTION　3	食事について	0.0%	27.3%	54.5%	18.2%	100%
SECTION　4	移乗や移動について	0.0%	45.5%	27.3%	27.3%	100%
SECTION　5	排泄について	9.1%	36.4%	27.3%	27.3%	100%
SECTION　6	入浴について	9.1%	45.5%	45.5%	0.0%	100%
SECTION　7	着替えや整容について	9.1%	27.3%	45.5%	18.2%	100%
SECTION　8	服薬について	9.1%	27.3%	54.5%	9.1%	100%
SECTION　9	意思疎通について	9.1%	27.3%	45.5%	18.2%	100%
SECTION　10	行動障害について	27.3%	27.3%	36.4%	9.1%	100%
SECTION　11	普通の生活やアクティビティについて	0.0%	36.4%	54.5%	9.1%	100%

自己評価及び改善が必要な事項

日中の活動量の確保と生活リズムの維持に注力している。活動量は、季節感や時代を感じる音楽療法を定期的に行い確保している。毎回テーマを変えて提供し続けたことで、不穏がみられる認知症の方が落ち着いて参加するようになった。懐かしい絵を用いた回想療法は、3～5人程度の小グループ介入で、楽しい会話が繰り返され、施設内に笑いが溢れ家庭的な雰囲気になっている。スタッフの認知症ケアスキルは、知見を有する講師をお招きした社内研修及びミッケルアート回想療法士1級の研修に加えてOJT等により知見を深めている。スタッフが経験を重ねたことにスキル取得等が加わり実践力が増している。入居者に関わる機会を意図的に増やしたことで積極的に取り組むスタッフが増え、ご家族からの評価に繋がっている。ケースカンファレンスは、主任を中心に行い、情報共有や事例検討を通じて入居者ごとの課題解決を図っている。今後は、スタッフごとの役割と課題解決プロセスを検討し、さらなるスキルアップを図る必要がある。

主任 小倉りさ

外部評価者

感染予防対策を図りながら家族や地域との関係を確保することは容易ではないと思います。家族との関係は、オンライン面会や電話で補われ、日常生活の写真により暮らしぶりを伝える機会を創っていました。地域との触れ合いは、外出支援や直接会うことが難しいなか、地域の方が施設に季節の野菜や花などを持ち込むなど、地域から支えられながら施設が運営されていることが確認できました。職員により施設の雰囲気は家庭的に保たれ、季節を感じる取組みとして、利用者の生活歴に合わせた手工芸や料理の盛り付けなど、暮らしの役割を担う生活リハビリが工夫されていました。一方、認知症ケアは、利用者の行動・心理症状にストレスを感じる職員も一定数みられ、３割ほどが「あまりできていない」と自己評価し、認知症ケアに自身が持てないと感じているようでした。社内研修、資格取得、ベテラン職員による0JT等でスキルアップを図る取組みがありましたが、困難ケースでは、ケースカンファレンスを時間をかけながら一緒に検討するなど、職員の自主性を引き出すことを検討する必要がありそうです。認知症ケアは、疾患別に適する支援や対応を検討する視点も大切になります。改善がみられないケースでは、医療連携により服薬調整等の検討が必要になるかもしれません。総合的な評価は、利用者に合わせた支援が多職種連携を図りながら適切に提供されていることが推察できました。今後も地域に根ざした事業所として頑張ってください。

〒891-0141 鹿児島市谷山中央5丁目37-11-302
特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所
博士（社 会 福 祉 学） 岩　崎　房　子